

鼎談

北見地方の

針葉樹の課題を探る

語る人 北見地方木材協会
会長 梨田安直さん
北見斉藤木材株式会社
代表取締役 中根利一さん
北見地方カラマツ製材協同組合
理事長 笠木恭治さん
編集 北海道林産技術普及協会
常任理事 小野寺重男

この鼎談は、去る5月1日、北見市林業会館において行われたもので、司会は、林産技術普及協会の理事でもあられる梨田会長さんをお願いした。なお、文責は編集者にあります。



梨田 今日北見としての問題をとりあげて討論して欲しいということなので、針葉樹関係を梨田、中根、カラマツから笠木というメンバーで、いたい放題ということで話し合いたい。

振りかえると、昭和55年を境として日本経済が低成長、縮小均衡に転じ、わが業界も例外でなく、在庫は過大基調、流通体系も整然としない、価格は生産費をカバーできない状況が続き、極度の減少として出てきたのが56年であった。

北海道木材協会では、全製材業種をあげて不況カルテルを組み、この危機突破を図ったが、57、58年と続き都合4年間、この基調は変わらず回復のメドもないという推移でありましょう。

一方、広葉樹は昨年春以来の高値基調が持続する気配で、良い傾向だと思いますがどうでしょうね。

広葉樹高値の原因

中根 広葉樹の高値の最大原因は、アメリカの景気回復で、建築が伸び、インチ材関係も輸出が良くなったことが引き金になっているでしょう。本来であれば住宅関係が伸びなければ家具関係も伸びないと思ったんですが、案外順調に伸びている。

もう一つは、パルプ関係が良くなって下の方から押しあげていた。他方、国有林の伐採がある程度頭打ちで押さえてきたという、原料の需給関係によるのではないのでしょうか。もう一つは、製材工場

が現状の針葉樹のように、過剰な工場が存在していないことが力になったのではないかと思います。

梨田 全く同感ですが、とりわけ工場数が適正であったことに加えて、北海道広葉樹協議会の手強い役割というのも評価したいです。



市場で余れば価格が保てないんだを合言葉のようにして、苦しいが3カ月及至6カ月間野積み乾燥し、市場への流れを調整していった。この北海道広葉樹協議会の機能を評価したいと思います。

広葉樹のこのペースをなんとか維持して欲しいものです。

中根 代替材の外材輸入というものが、その割に入る恐れがないですね。そんな点では、全然針葉樹とは違うんだなあ。

梨田 木材指向ということも根強く持ち上がって、良い材料になっているが、針葉樹は依然として何ら先が見えないが。

カラマツ製材

中根 カラマツの昨年、一昨年の状況は、針葉樹と違って、ある程度採算ベースに乗ったという形でないだろうか。ということは、工場が少ない関係や森林組合の結束で消費地を押さえ、道外出荷をまとめあげてきた。

このような状況の中で、原料管理からも製材工場をもう少し増やしても良いという森林組合を中心にした問題が出てきている。

笠木 私共北見地方カラマツ製材協組と十勝カラマツ製材加工協組が、価格問題について年2回懇談会を開催しています。この両協組のカラマツ製材は、道内から東京方面に出している移出量の70%位のシェアをもっています。ところが、残念ながら定尺の梱包材は3万6千円位の現状でして、丸太価格も上がりつつあり、2千円アップをお願いしていますが、外材とのからみもあり、なかなか上がらないというのが実態です。

また、網走管内のカラマツ製材工場は、大小合わせて35工場あります。それに昭和62年の立地適正化計画では17工場だろうと言われており、もう現状でもかなりオーバーしている頭数です。そういう中で新林構の補助金絡みの製材工場が、最近管内の市場に製品を出すようになってきました。

私はこれらのことが一番心配だというのが現状です。

新林業構造改善事業

梨田 今言われた新林業構造改善事業ですが、これは、第一次、第二次の林構が生産基盤整備に力点をおいて促進された。この段階を卒業して、新林構の目指すものは、新しい付加価値あるいは新流通体系、さらに一次における林業従事者の定住対策などが主眼目です。また、新林構の対象が民有林、森林組合、しかも自治体と一体となって推進しようということです。したがって、国は一方では資源の充実、一方で利用ということで補助金を出して促進している。

私は道林務部の林業振興審議会の委員ですが、新林業構造改善事業は、まず地域指定、そして事業指定という形で実行に入るんです。その一つの核になる付加価値という点で見直してみますと、年々収穫量が増してくるカラマツを対象にその製材設備を更新したり、新規取得したいという中身のように思えてならんものもある。

補助事業を地域のために活用し、同種の生産設備が無計画、無秩序に増えることにならぬようにしなければなりません。

訓子府方式

中根 私の関係で考えると、製材工場がある程度転換しなければならない形が出てくるだろうと思います。この場合、訓子府方式といいますか、針葉樹製材工場の三つと森林組合が集って一つの形態を作った。カラマツもやはり針葉樹のほうに入るという形の生き方がこれから先考えられるかもしれませんね。

梨田 まあ業種と地域で考える要点、それをダ

ブラセながら、訓子府方式はカラマツの側から考えても、既存の製材業、針葉樹製材業の立場から考えても、典型的なお手本になるケースですね。

笠木 指定にあたっては地域の市町村でなく、支庁単位の広域的な同意を受けるべきだという提案がなされたと聞いています。

この網走管内は、現状でもカラマツ製材工場が過密状態にある。ここにまた新規のものを入れるとトラブルの原因になる。これは是非林振審等で十分実態を訴えて頂きたいというのが、私共業種としてのお願いなんです。

梨田 北海道製材業構造改善事業は、昭和45年以來、いろいろ手法を変えながら継続している。

56年には国が木材産業再編整備緊急対策事業、さらに59年度拠点整備事業によって、ちょうど今出ているような物の考え方、地域・業種として総合的に、立地適正、需給タイトと生産設備がいかにあるべきか、新しい付加価値開発をどうすべきかということを総合的にプログラムとして拠点整備を図っていくということなんです。

今、カラマツの方から問題提起されましたが、行くだけ行ってしまって、片一方で北海道製材構造改善事業が唱えていると同じ問題をカラマツの業種で、再び採り上げるような愚かさは避けたいですね。

一方、構造改善事業は、地域の雇用問題にも関連しますので、この取り組みについては町村も一緒になって模索、立案し、実践過程で地域自治体の協力を求めあってゆかねばなりません。

今後の対策

中根 木材製品の多方面・分野への需要開発などを地区林産振興会の中で研究してもらうことも必要ですね。

梨田 先般、移動林産試がこちらに参りました時に、私は是非そのプロジェクトチームに入ってもらって、その地域ブロックの再編計画の立案、新しい商品開発を企業化できる役割をはたして欲



しいと、林産試に強く要望しました。

また、天下のパルプが、各社合意して一部生産設備の合理化、廃棄を促進している時勢ですから、木材協会としても、1カ月ごとに在庫を掌握、これを見ながら協調をよびかけていくという、きめ細かな体制の持続が必要でしょう。この場合、自分は全面的に地場売りだとか、地場商品が7割だから関係ないんだとかいう考え方では話にならない。需給を基調として価格維持策も価格カバー策もやろうという必死の取り組みなわけですから。

中根 その点は改めてもらわないと、地場の価格を維持するという事は、全体の価格維持に大きくつながるわけですから、地場を守ろうとするならば、自分たちで生産しているうちの一部を消費地に出して、地場を守るんだという形になってもらわないと。

梨田 昭和56年に、業界は不況カルテルを各地域でやりぬいた。この信頼関係を見失ってはならない。その点、前に述べたパルプ関係業界を見習って、各地域で在庫調整して苦境突破しなければなりません。

笠木 その点ではカラマツ業界はまとまっています。昭和40年頃からカラマツを注目して工場が出来ましたが、まとまる団体が有りませんでした。45年に北見地方カラマツ製材協会を作って関東・本州方面に出し、一方、先程も述べました帯広・十勝地区業界の方々と市況懇談会を開催しております。これが出来るようになってから、比較的安定した価格で問屋にもってゆけました。この両地区の連帯感によって、カラマツが低価格ですが比較的順調に売れている原因でないかと考えます。

梨田 針葉樹業界も、北見のシェアは20%、十勝・釧路・根室、さらに上川・宗谷の三地区で全道の70%の生産シェアです。ですから、この三地区協議会で話し合っておりますが、今のカラマツの話は大変参考になります。

笠木 それと、私共が競合する森林組合、道森連との関係を密にしながら、これからは関西方面までカラマツを伸ばせるんじゃないかという話題も出ております。

梨田 そういう点では、北海道木材協会の仕事の大きな部分は山元工場の問題であるとして取り組んで欲しい。私は、針葉樹、広葉樹とか製材に分けて組織を明確化して、道木協というものをもう一回作り直してゆくのも方法でないかと考えます。また、従来は川上を背景として物事を考えてきた傾向があるが、今やもう川下から物を見直してアプローチしなければならない。

一例として、最近、秋田県で第三セクターで動き出したものがあり、埼玉県では建設業界と製材業界によるベンチャービジネスが注目されている。

資源、原料、加工、組み立て、そこに一種のシステム化、あるいはベンチャービジネスという形が、エゾ・トド分野に強く要点として出てきていると言えるのではないのでしょうか。これは、先程も述べた地域展開とかブロック展開とか、そういう形も十分に想定されましよう。

わけても、道内三大拠点の最右翼にある北見のカラマツについては、商標化できるものにならなければなりません。

笠木 私共のカラマツ製材協同組合は参加15社、素材で約20万m³扱っておりますが、出来れば商標の一本化、製品の統一化がはかれぬか検討中です。そうなれば、北見に注文すれば同じ物が出てくることになりますので。



梨田 カラマツに関する丸太、注入材、梱包材など、あらゆる物が受・発注できますね。

笠木 組合内部のこれからの役割分担でないかと思っております。

梨田 エゾ・トドマツも同じような発想が出来ましよう。帯広や旭川には、針葉樹の協同組合がありますが、北見にはありませんので、早く作ったらどうかという意見もあります。

中根 どうでしょうね。かって同じような形で東京の木場に北海道の針葉樹製材の荷受け機関を作って取り引きをやりました。その時、一番問題にされたのは通年取り引きで、結果はうまくゆき

ましたが、一時期価格が上がった時期にスパッと切ったので、あれっきり取り引きは無くなりました。

梨田 通年取り引きで、道内生産量の10%又は20%程度、道外市場へはけることが望ましい。この場合、現状の犠牲出荷をカバー出来る方策も検討しなければなりません。

中根 東京だけが中心でなく、青森の木材商業協同組合とも取り引きしたことがあり、吉野のスギを使っている地帯にも製材を移出したことがあります。

梨田 笠木さん、カラマツ問題で言い残していることがあれば。

笠木 心配なことは、網走管内の57年度のカラマツ素材生産量は約30万m³、面積11万haありまして、65年に61万m³、ピークの79年が200万m³と言われておりますが、カラマツの植栽が急減しております。是非、これからカラマツを植える運動をまた別の角度から考えてみる必要があるというのが、組合内部で出てくる話題です。

梨田 材価については、カラマツを含む適正な価格を建議するなかで、造林を含む再生産ローテーションというものが組み上がっていくべきでしょう。

中根 やはり製材の価格が上がってもらわなければ、意欲的にカラマツを植えるという精神にはならないだろう。

梨田 非常に迷う状況になってますよね。以上、さまざまな問題について、話して頂きました。

試行錯誤もあれば、話し自体に行ったり来たりもございましたが、北海道立林産試験場監修になる当林産技術普及協会の機関誌「ウッドエイジ」を通じて、北見地方の問題を探ろうということに何等かのお役に立てば幸いです。同時に私共自体が問題意識を整理しながら語り合った次第です。

今日ほど業界努力、地域努力が必要な時はないでしょう。そこに木材協会もあれば、地域の市町村もあるということでしょう。

当分は、まだ続くであろうこのトンネルを業界相互が一致団結して危機をくぐりぬけましよう。